View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

「過ぎる」の構文化について

志　賀　里　美

Constructionalization of “sugiru”

Satomi Shiga

要旨

本稿では、現代語のコーパスである『BCCWJ　コア』と明治期のコーパスである『近代女性雑誌』から「過ぎる」という語を抽出し、比較することにより、「過ぎない」という「過ぎる」の否定形が「ただ（の）～である」という意味を持った過程、つまり構文化していることについての考察を行った。

その結果、明治期と現代で共起する品詞ごとの使用に差が見られ、それは「過ぎる」が機能語化、つまり接尾辞化したため、種々の語と共起するようになったためであるという結論に至った。また、意味や肯否の関係をみたところ、明治期には存在した「に過ぎる」「に過ぎない」の対応が現代語になく、明治期には「に過ぎる」という形式で「ただ（の）～である」という意味を表すことから、「過ぎる」が構文化していることを示した。

そして最後に、本稿で扱わなかった明治期から現代にかけての橋渡し部分についてさらなる調査が必要なことや、「た形」も構文化する一つの要素と考えられる可能性があることを今後の課題として示唆した。

キーワード：補助動詞、「過ぎる」、構文化、コーパス
Key Words：subsidiary verb, “sugiru”, Constructionalization, corpus

1．はじめに

「過ぎる」は、「時間が早く過ぎる」のような用法のほか、「この問題は難し過ぎる」「昼ごはんを食べ過ぎた」のような複合動詞[1]の用法があり、すべて「時間が早く過ぎない」「この問題は難し過ぎない」「昼ごはんを食べ過ぎ

なかった」のように否定の形式を持っている。だが、「それは言い訳に過ぎない」や「主張しているに過ぎない」は、「＊それは言い訳に過ぎる」「＊主張しているに過ぎる」という肯定の形式では使用されず、意味も「過ぎる」を単に否定にした意味ではなく、構文化され、「ただ（の）～である」という特別な意味を持つ。

しかし、明治期の資料を見ると、「ハイパポレチカルに過ぎて」「数百円に過ぎず」「鼓動するに過ぎたり」「よんだに過ぎぬ」のように、「に過ぎる」「に過ぎない」の両形が存在している。いつから「に過ぎない」のみ用いられるようになり、構文化されたのだろうか。

本研究では、現代語のコーパスである『BCCWJ　コア』と明治期のコーパスである『近代女性雑誌』から「過ぎる」という語を抽出し、比較することにより、「過ぎない」という「過ぎる」の否定形が「ただの～である」という意味を持った過程、構文化した過程を追いたい。

２．先行研究と構文化について

２．１　「過ぎる」の先行研究

「すぎる」の構文に関しての研究には、中村（2005）などがある。中村（2005）は、『青空文庫』の明治期から昭和前期の文学作品を中心に用例を抽出し、分析を行っている。接続する品詞ごとに用例を挙げ、共起するものの特性の抽出を試みてはいるが、「～すぎる」についてのみの抽出であり、「すぎる」から連続的には考察を行っておらず、どのようなものが構文化なのかということも明確にはしていない。

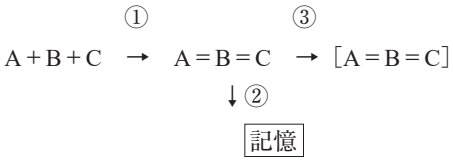
また、複合動詞「V＋過ぎる」については、由本（2012）を始め、複合動詞の意味についての考察など多くあるが、いずれも「過ぎる」から連続的に論じているものは少なく、共時的観点からの研究が多いため、今回は「四十を過ぎて」のような本動詞や「近すぎる」などの複合動詞も含めて「過ぎる」の用例を抽出し、連続的に考察を行った。

２．２　構文化とは

秋元（2015：182）が指摘しているように、日本語学では構文という語を用いて論じられることが多いが、定義が明記されていることがほとんどないように思われる。事実、『日本語文法事典』(2014）にも立項されていない。

今回構文化として考えているのは、前田（2015：117–118）のモデルである。

図１　構文化



> まずA、B、Cからチャンク‘A=B=C’が形成され（①）、新規の項目として記憶に貯蔵される（②）。しかしチャンクの状態それ自体は流動的なものであるため、さらなる言語経験によって強化されなければ忘却され記憶に維持されない。結局、チャンクが実際に新規の構文へと発達をとげるかどうかは、ひとえにその後の使用状況による。その後も反復使用が持続されれば、チャンクは認知的に強化され、より固定度の高い新規の構文フレーム［A＝B＝C］へと発達する（③）。筆者の言う「構文化」とは図の①から③までのプロセスの総称である。
>
> 前田（2015：117–118）

本論では、この前田の「構文化」という考えをもとに、「過ぎる」が共起する品詞や意味を考察することにより、「過ぎる」がある一定の形式を持ち、意味も変化することによって、構文化していると考える。

３．データと抽出方法

現代語の用法として、『BCCWJ　コア』から、語彙素：「%過ぎる」で用例を抽出した。その後、目で分類を行った。

どのような過程で作られてきたのか、ということを見るために、今回は、言語変化が大きく起きたと思われ、また「過ぎない」の初出例の時代である近代に焦点を当て、『近代女性雑誌』から「過ぎ」「すぎ」というキーで「過ぎる」を抽出した[2]。だが、『言海』に「過ぎる」の項目には、「すぎる（動）過ぐの訛。」とあったため、「過ぐ」「すぐ」の検索も行い、その後、「平らかなることを得せしむるのもの也。聖經に云く、神は見過ぐしに爲玉ふと。嗚呼、大慈大悲の切愛を以てして、」のような明らかに現代語では「（見）過ご

す」と訳せると思うものは除外した。

その結果、『BCCWJ　コア』から259語の用例、『近代女性雑誌』からは、381語の用例を得た。なお、『BCCWJ　コア』と『近代女性雑誌』における語数や年代などは以下の表１の通りである。

表１　『BCCWJ　コア』と『近代女性雑誌』の詳細

	総文字数	年代	ジャンル	過ぎる出現例（延べ）
BCCWJ　コア	1,098,511	1976～（「白書」のみ）2001～2005・2008（「ブログ」のみ）	「新聞」「雑誌」「書籍」「白書」『知恵袋』「ブログ」	259
近代女性雑誌	2,100,000	1894・1895・1909・1925	『女学雑誌』『女学世界』『婦人倶楽部』	381

４．考察

４．１　共起する品詞

まず、『BCCWJ　コア』と『近代女性雑誌』において、「過ぎる」と共起する品詞はどのような形式が多かったかを見てみると（表２）、『BCCWJ コア』『近代女性雑誌』ともに「四十を過ぎて」のような「名詞（助詞）＋過ぎる」の形式が多く、次いで「動詞（に）＋過ぎる」「い形容詞＋過ぎる」「な形容詞＋過ぎる」「副詞（に）＋過ぎる」の順で変わりがなかった。

表２　『BCCWJ　コア』と『近代女性雑誌』における品詞別の出現数

	『BCCWJ　コア』		『近代女性雑誌』	
	延べ語数	異なり語数	延べ語数	異なり語数
動詞（に）＋過ぎる	81	63	103	78
名詞（助詞）＋過ぎる	94	79	215	187
い形容詞（に）＋過ぎる	65	39	31	23
な形容詞（に）＋過ぎる	19	19	30	29
副詞（に）＋過ぎる	0	0	2	2

だが、図２、３をみると『BCCWJ　コア』では「名詞（助詞）＋過ぎる」「動詞（に）＋過ぎる」「い形容詞（に）＋過ぎる」の使用はほぼ同じぐらい

図2

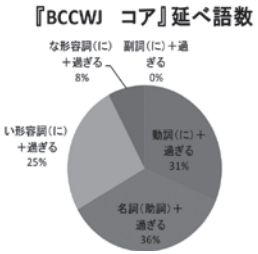
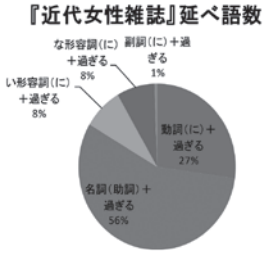


図3



の数に対し、『近代女性雑誌』では「名詞（助詞）＋過ぎる」が圧倒的に多く、「い形容詞＋過ぎる」は少ないことが分かる。

なぜ「名詞（助詞）＋過ぎる」の形式が『近代女性雑誌』に多いのだろうか。その理由を考えてみると、

1）まず、『近代女性雑誌』には現代語には使用がない一語化したような語や形式があることが挙げられる。

「名詞（助詞）＋過ぎる」の形は、『BCCWJ　コア』（以下、『BCCWJ　コア』からの抽出例は（B）と記す）では通常、

（1）「可哀相に、四十を過ぎてまだ生きてるのね」静さん[3]（B）

（2）でもこれも「喉元過ぎれば…」のパターンでしょうか？？？（B）

のように通常「助詞」を伴う形式、もしくは省略された例しか見られないが、『近代女性雑誌』（以下、『近代女性雑誌』からの抽出例は（近）と記す）には助詞がない形式の一語化したような語で、現代では使用しない語が見られた。

（3）老人の心持とするよりも、若い華やいだ人のさだ過ぎ[4]てゆく寂しみを鏡の前に述べるとある方が面白い。（近）

2）また、「これに　すぐ／すぎ～」という形式も現代では使用されない例であろうか。『近代女性雑誌』には多く見られたことが挙げられる。

（4）令子令孫御繁育なされ御眼前を慰せられ候事何の御樂か是に過ぐべき哉是に付ても御病身等に御成候ては此御樂も御心底に任せられ（近）

（5）學派、學家の相異なるもの、屡ば之に過ぎざることあり。試ろみに、其形を破して、其神を露はさば、（近）

次に、現代にもある用法だが、『BCCWJ　コア』には出現しなかった例が

『近代女性雑誌』では３例見られたことも挙げられる。

（６）元の家柄をのぞんで私には過ぎた様な話も多かつたのですが、皆何の彼のと難癖つけてお流れに（近）

３）しかし、一番の理由は、現代では「過ぎる」が多様な「い形容詞」に後接できるようになったことであろう。『BCCWJ　コア』では「名詞（助詞）＋過ぎる」の形式以外にも他の品詞とも使用される頻度が高くなったため、『近代女性雑誌』で多く使用されていた「名詞（助詞）＋過ぎる」の割合が低くなったと考えられる。これは、「過ぎる」が機能語化、つまり接尾辞化したため、種々の語と共起するようになったためだとは考えられないだろうか。

そこで、接尾辞化していった可能性を探るべく、次に意味変化、多義性が『BCCWJ　コア』と『近代女性雑誌』でどのようにあるのかについて見てみたい。

４．２　品詞別意味

ここでは、接続する品詞ごとに意味を見ていきたい。まず、表３に全体の結果を示す。

４．２．１　「動詞（に）＋過ぎる」

「動詞（に）＋過ぎる」において特徴的なのは、『BCCWJ　コア』は『近代女性雑誌』と比べ、「極度」の意味が71例と多いが、『近代女性雑誌』は、「経過・通過」が21例、「ただ～である」という意味が46例と多いということである。「過ぎる」の元々の意味は「経過・通過」の意味だと考えられ、「極度」の意味は機能語化した意味だと考えられる。つまり、明治期は基本的な意味と「ただの～である」という意味の使用が多いが、現代は「極度」の機能語化した意味（＝文法化した意味）の使用が多いことが分かる。

しかし、機能語化した意味とされる「極度」の意味自体は、特に明治期と変化は見られず、現代同様の意味で使用されている。

（７）友人や同僚が食べ過ぎてしまうこの季節、ひそかに１人で頑張り（B）

（８）美味お菓子かお汁粉の仲間で味の割合に滋養が少く、あまり食べ過ぎれば健康を害する、（近）

また、「経過・通過」も意味的変化は見られず、「ただ～である」という意

表３　『BCCWJ　コア』と『近代女性雑誌』における品詞別の意味

品詞	意味	BCCWJ　コア	近代女性雑誌
		出現数（延べ）	出現数（延べ）
動詞（に）＋過ぎる	合計	81	103
	経過・通過	7	21
	極度	71	36
	ただ～である	3	46
名詞（助詞）＋過ぎる	合計	94	215
	経過・通過	54	92
	極度	2	17
	ただ～である	38	98
	分を超える	0	4
	一語化	0	3
	？	0	1
い形容詞（に）＋過ぎる	合計	65	31
	極度	65	29
	ただ～である	0	1
	？	0	1
な形容詞（に）＋過ぎる	合計	19	30
	経過・通過	0	4
	極度	19	24
	ただ～である	0	2
副詞（に）過ぎる	合計	0	2
	経過・通過	0	1
	極度	0	1
総計		259	381

味も明治期も現代も「に過ぎない（ず）」という否定の形で使用されている。

（９）ただ暗転した時の舞台の上を通り過ぎていったのだ。（B）

（10）何事か高聲にいひながら、洞窟の前を通り過ぎた。（近）

（11）分かりやすいフレーズを求めたにすぎない。（B）

（12）よからうと思ひますのにこれも矢張りお菓子を食べて餘興を見るに過ぎないといふのは、實に齒痒い事で御座います、（近）

以上、「動詞（に）＋過ぎる」のおいては、意味や形式的変化は見られな

いが、使用されている意味の頻度が異なることが分かった。

４．２．２　「名詞（助詞）＋過ぎる」

「名詞（助詞）＋過ぎる」において特徴的なのは、『BCCWJ　コア』『近代女性雑誌』ともに、他の品詞に比べ、出現頻度が一番高いこと、また、「ただ（の）～である」という意味の使用も他の品詞に比べ多いことである。

出現頻度が高い理由について、３．１の１）２）３）で少し述べたが、さらに、「ただ（の）～である」という意味が多いことも起因していると考えられる。意味をみると『BCCWJ　コア』『近代女性雑誌』ともに、大差ない。

(13) 北海道は在宅が二十二％に過ぎず、全国最低でした。(B)

(14) 大國の王も倒れては地に印する所ろ、六尺の丈けに過ぎず。(近)

だが、形式的に差が見られるものがあった。通常「ただ（の）～である」という意味の場合には、「に過ぎない」と「に格」を使用しているのだが、『近代女性雑誌』には「を格」を使用しているものが見られた。

(15) 小兒の生れて數週を過ぎざるに乳の粉又はおも湯等にて哺育するは危險のことなり（近）

(16) 米が何百石あつたとて、妾が一日に食べるお米はやつぱり數合を過ぎないものを。(近)

これは、この時代は「ただ（の）～である」という意味を表す際に、「に過ぎない」という形式（＝構文）が、まだ定着しておらず、「を過ぎない」と揺れていたということではないだろうか。

２．２で示した前田モデルに即して考えると、「②A＝B＝C」から「③［A＝B＝C］」へと進む過程の揺れがみられていると思われる。②から③への移行には「チャンクが実際に新規の構文へと発達をとげるかどうかは、ひとえにその後の使用状況による。その後も反復使用が持続されれば、チャンクは認知的に強化され、より固定度の高い新規の構文フレーム［A＝B＝C］へと発達する（前田　2015：117–118)」とあるように、使用状況が関係してくる。

つまり、「に＋過ぎない」と「を＋に　過ぎない」という両形のチャンクが形成され、記憶には貯蔵されているが、反復使用が両形持続されているため、その両形が『近代女性雑誌』には出てくるということである。

さらに、「極度」でも、接続形式をみると、『BCCWJ　コア』と『近代女

性雑誌』では多少異なるものがある。それは、『近代女性雑誌』では「極度」のときに「に過ぎる」と「に格」を取ることが多いことと、「これに過ぎる」という形式を用いることである。

『BCCWJ　コア』では

(17) でも、いい返すと言葉が過ぎ、思った以上に彼を傷つけてしまう（B）

(18) 新しいマイカーでお出迎えあまりに寝起き過ぎて頭が廻らない僕。(B)

のように「が格」、もしくは「名詞＋過ぎる」と格成分がないのだが、

『近代女性雑誌』では、

(19) 弦齋の彼等を描くや屡ハイパポレチカルに過ぎて、非尋常の事を語るを喜ぶものからいやみあり。(近)

と「に格」を伴う例が見られた。このことから、明治期はまだ「極度」と「ただ（の）～である」という意味ごとに「に格」や「を格」の使用が見られ、形式的なすみ分けはされていなかったが、現代語では「極度」の意味のときには「に格」を用いず、「ただ（の）～である」という意味のときには「に格」を用いるというようにすみ分けが行われたのではないだろうか。

また、「これに過ぎるもの」という形式は『BCCWJ　コア』には出現しなかったが、『近代女性雑誌』では5例あった。

(20) 感情の一致せざるは人世最大の恨事にして凡そ不斷直接の苦痛之に過ぐるものはあるまじくと存候。(近)

(21) 萩原重秀彈劾の一章まことに壓卷白石の人物を畫く、之に過ぎたるもの多からじ。(近)

これらは、一種の構文化したものと見ることができるが、現代でこれらの構文の使用はない。

その他の「経過・通過」は意味や形式的変化は見られなかった。

(22) モンテネグロ）を空爆してから5年が過ぎた。(B)

(23) 熊本から大分方面に向かい、県境を過ぎてしばらく行くと「竹田市街」という（B）

(24) 帰りは遠まわりお盆過ぎてもちょこちょこ人はいるのね（B）

(25) こんなことを想像して居る中に、はや十二時も過ぎた（近）

(26) 河添ひの柳枯れて物淋しき冬の空、いくつの町を過ぎて大きな洋館と日本造りの角構へ、(近)

「分を超える」という意味は、「名詞（助詞）＋過ぎる」の形で『BCCWJ

コア』には出てこない意味である。

（6再掲）元の家柄をのぞんで私には過ぎた様な話も多かつたのですが、皆何の彼のと難癖つけてお流れに（近）

だが、「彼女は私には過ぎた嫁だ（森田　1989：548）」という言い方は現代でもするため、ただ『BCCWJ　コア』の中には出現しなかっただけだと考えられる。

以上、「名詞（助詞）＋過ぎる」においては、他の品詞に比べ、出現頻度が一番高いことと、「に格」と「を格」で揺れがあったこと、そして、『近代女性雑誌』だけに見られる特有の形式があることを述べた。

4.2.3　「い形容詞（に）＋過ぎる」

「い形容詞（に）＋過ぎる」において特徴的なのは、『BCCWJ　コア』での使用が多く、そして、出現する意味はほとんどが「極度」の意味であることである。

(27) 福井は清原と近すぎるから使いたくない。(B)

この意味は『近代女性雑誌』でも見られる。

(28) 遅く招ばれて困ることを思へば早過ぎる位に招ばれて仕度が充分に出來る方が何れ丈け仕合か知れないと（近）

ただ、『近代女性雑誌』の場合は、「過ぎる」の前に

(29) 卿は誤つて日本に生れたり。乃至その出現は早きに過ぎた。(近)

のように「に」を挿入している例が多い（31例中9例）。

なぜ、「い形容詞（に）＋過ぎる」が『近代女性雑誌』よりも『BCCWJ コア』のほうが多いのか、理由は明確に分かりかねるが、一つの可能性として、「名詞（助詞）＋過ぎる」と「動詞（に）＋過ぎる」に「極度」の用例があったことから、明治期に少しずつ「い形容詞（に）＋過ぎる」にも機能語化した意味の使用が広がったとは考えられないだろうか。そのため、「い形容詞（に）＋過ぎる」の場合には、「名詞（助詞）＋過ぎる」同様、「に格」が挿入されているものも多く見られ、「動詞（に）＋過ぎる」のように「に格」がなく、そのまま接続する形式も見られるのではないだろうか。

以上、「い形容詞（に）＋過ぎる」は『BCCWJ　コア』での使用が多いこと、また、『近代女性雑誌』では「に格」の挿入が見られることから、明治期に「い形容詞（に）＋過ぎる」の使用が広がった可能性があることを示唆

した。

4.2.4 「な形容詞（に）＋過ぎる」

「な形容詞（に）＋過ぎる」は『BCCWJ　コア』『近代女性雑誌』ともに一番使用が少ない接続形式である。だが、やはり「い形容詞（に）＋過ぎる」同様、『近代女性雑誌』のほうには「に格」の挿入が見られる（30例中７例）。

（30）服装の材料は質素なるも縞柄模様などのハデに過ぎて本校の生徒に不似合なるは御用捨ありたし（近）

「な形容詞（に）＋過ぎる」は、使用頻度は少ないが、「い形容詞（に）＋過ぎる」同様、『近代女性雑誌』のほうには「に格」の挿入が見られることを見た。

4.3　否定形と構文化

ここまで、『BCCWJ　コア』と『近代女性雑誌』に出現した用例の頻度と意味、形式をもとに違いを見てきた。その中で、意味と形式が関係しているものが「に格」と「否定形式」であった。そこで、最後に、否定形式と構文化について考えてみたい。

下記の図４、５は、『BCCWJ　コア』と『近代女性雑誌』に出現した用例を共起する品詞別にし、その中の肯定と否定の数を示したグラフである。

図４　『BCCWJ　コア』における品詞別

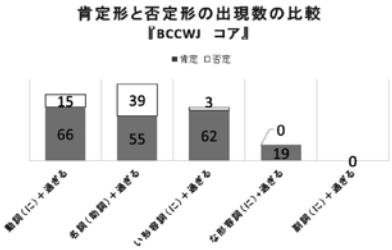
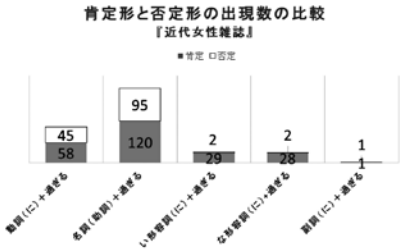


図５　『近代女性雑誌』における品詞別



副詞を除いて考察を行うと、『近代女性雑誌』にはどの形式にも肯定・否定の形があるのだが、『BCCWJ　コア』には、「な形容詞」には見られない。また、「動詞」と「名詞」に注目してみると、『近代女性雑誌』にはおおよそ半数ずつ肯定否定の形式があるにもかかわらず、『BCCWJ　コア』には明ら

かな偏りが見られる。特に、動詞においては顕著である。このとこから、『近代女性雑誌』の時代には「に過ぎない」という形式が構文化していない可能性が疑われる。

そこで次に、「に」の前接と肯定否定の形式に注目をし、考察をしてみたい。下記の図６、７は先ほどの図４、５に「に」が前接するかどうかを分け、表にしたものである。

図６　『BCCWJ　コア』における品詞と「に」の接続の有無別

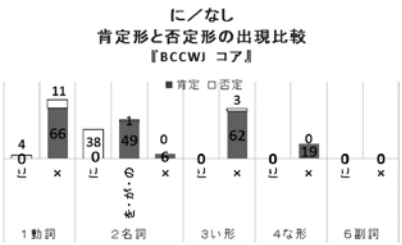
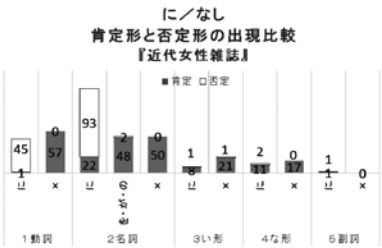


図７　『近代女性雑誌』における品詞と「に」の接続の有無別



『BCCWJ　コア』では、「動詞＋に過ぎる」という形式は１例もないが、『近代女性雑誌』には、１例ある。

(31) 多血なる彼が心臓は餘りに之が爲に鼓動するに過ぎたり。(近)

このときの意味は「ただ～である」という意味かと思われる。無論、『近代女性雑誌』にも（32）(33）のような「動詞＋に過ぎない」の否定形式も45例あり、その場合には、全て「ただ～である」という（34）の現代と同じ用法であった（否定形式の45中45例)。

(32) 小説なども父にかくれてある二三をよんだにすぎぬ人のいふ處女時代のうるほひもなやみもない。(近)

(33) 其の據つて論駁する所ろの理由を聞けば、非道理なりと言ふに過ぎず。(近)

(34) 過ごすことの自由を主張しているにすぎず、男にとってもっとも都合のよい（B)

『BCCWJ　コア』には、「動詞＋過ぎない」という否定形式も出現しているが、『近代女性雑誌』には、１例も見られなかった。これはたまたま出なかっただけだと考えていいだろう（「名詞＋過ぎない」の出現もないため)。

名詞の場合は、さらに顕著な結果が出ている。

『BCCWJ　コア』で「動詞＋に過ぎない」の用例は４例と少ないが、「名詞＋に過ぎない」は、38例と多数あり、名詞のほうが「＋に過ぎない」の形式をよく用いられやすい傾向が見て取れる。

一方、『近代女性雑誌』では、「動詞＋に過ぎない」は45例だが、(35)(36)のような「名詞＋に過ぎない」の形式は93例、(37)(38)のような「名詞＋に過ぎる」の例は22例（「動詞＋に過ぎる」は１例のみ）もある。

(35) 同會が大方有志者より得たる寄附金は僅に數百圓に過ぎず（近）

(36) 是等は大凡職業上より來る必然の結果に過ぎざれども、亦内醜を顧みずして外美をのみ飾るの習俗を發達せし（近）

(37) 人物と違つてよほど選ぶ時に注意しなければなりません。體裁に過ぎるもの、洗濯のきかぬもの、汚れ易いもの、地質の弱いもの（近）

(38) 晦菴を宗とするものは、なほ釋徒の日蓮を奉ずる、或は佛に過ぐるが如し。朱子の語といへば、一意崇信して敢て、其聖經にのように（近）

だが、意味を見てみると、「ただの体裁である」「ただの仏である」と現代の「に過ぎない」の否定形も同じ意味である。このように「名詞＋に過ぎる」で「ただ（の）～である」という意味を表すものが４例見られ、現代にはない用法である。また、『近代女性雑誌』において、「名詞＋に過ぎる」という形式で(39)(40)のような「極度」を表す例が14例見られた。

(39) 世の事、悲痛を極むるもの少なからぬ中に、明治十年の内亂に過ぐる、惨憺の事何處にありや。（近）

(40) 感情の一致せざるは人世最大の恨事にして凡そ不斷直接の苦痛之に過ぐるものはあるまじくと存候。（近）

『BCCWJ　コア』では極度の意味を表すときには「に過ぎる」ではなく、(41)のような「助詞＋過ぎる」もしくは(42)のように「過ぎる」のみの形式である。

(41) でも、いい返すと言葉が過ぎ、思った以上に彼を傷つけてしまう（B）

(42) が新しいマイカーでお出迎えあまりに寝起き過ぎて頭が廻らない僕。（B）

このことから、『近代女性雑誌』の頃は「に過ぎる」「に過ぎない」はそれほど強く結びつきがあるというわけではなかったと思われる。

そして、『BCCWJ　コア』には、い形容詞、な形容詞、に「に過ぎる」「に

過ぎない」が後接することはないが、『近代女性雑誌』では、(43)(44) い形容詞、(45)(46) な形容詞、に「に過ぎる」「に過ぎない」が後接する例がある。

(43) 悉く嬰兒の發達に利益あるにあらず、或は其刺戟の度、強きに過ぎて身躰の組織を害し、發育を妨ぐる如きものあり、或は其の經（近）

(44) 輕薄野卑を免がれざるを如何せん、唯だ夫れ細きに失せず太きに過ぎず温順典雅なるは金澤の女子なるかな、蓋し其温順は藩祖夫人芳（近）

(45) 月華族女學校服裝の材料は質素なるも縞柄模様などのハデに過ぎて本校の生徒に不似合なるは御用捨ありたし因に記す同校にては（近）

(46) 己の腑甲斐なさを表はし、子供の爲めだからの申譯は多く僞善にすぎない。何れにしても醜いとも醜いものである。（近）

『近代女性雑誌』では種々の品詞に「に過ぎる」「に過ぎない」が後接しているのだが、意味としては「に過ぎる」で「ただ～である」という意味を表すものはない一方、「ただ～である」の意味になるときで「に過ぎる」という肯定形は動詞と名詞にしか見られない。

以上のことをまとめると、表４になる。

これらの結果から、明治期には「に過ぎない」という形式はまだ明確に構文として確立していなかったが（「動詞に＋過ぎる」「名詞に＋過ぎる」という形式があるうえ、「に過ぎない」と同様の意味であり、「に過ぎる」「に過ぎない」が種々の品詞と共起するため）、現代においては「動詞に＋過ぎる」「名詞に＋過ぎる」という形式がないことから、「に過ぎない」は構文化していると考えられる。

５．おわりに

本稿では、『BCCWJ　コア』と『近代女性雑誌』から「過ぎる」の用例を抽出し、比較を行った。

その結果、明治期と現代で共起する品詞ごとの使用に差が見られた。そして、肯否の関係をみると、「に過ぎる」「に過ぎない」の対応が現代語にないことから、構文化していることが分かり、反対に「これに過ぎるもの」というのは明治期には決まった形式で使用されているため、構文化していたと考えられるが、現代での使用は見られない。さらに、「～に過ぎない」という構文化は、『日本国語大辞典』によると初出例が夏目漱石の1907年であった

表4　肯否と意別出現数

				『BCCWJコア』出現数（延べ）		『近代女性雑誌』出現数（延べ）	
1動詞	に	肯定	−	0	○	0	1：経過・通過
				0		0	2：極度
				0		1	3：ただの〜である
				0		1	合計
	に	否定	○	0	○	0	1：経過・通過
				1		0	2：極度
				3		45	3：ただの〜である
				4		45	合計
	×	肯定	○	7	○	21	1：経過・通過
				59		36	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				66		57	合計
	×	否定	−	0	−	0	1：経過・通過
				11		0	2：極度
				0		1	3：ただの〜である
				11		1	合計
合計				81		103	
2名詞	に	肯定	−	0	○	0	1：経過・通過
				0		14	2：極度
				0		4	3：ただの〜である
				0		4	4：分を超える
				0		0	一語化
				0		22	合計
	に	否定	○	0	○	0	1：経過・通過
				0		0	2：極度
				38		92	3：ただの〜である
				0		0	4：分を超える
				0		0	一語化
				0		1	?
				38		93	合計
	を・が・の	肯定	○	48	○	47	1：経過・通過
				1		1	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				0		0	4：分を超える
				0		0	一語化
				0		0	?
				49		48	合計
	を・が・の	否定	○	1	○	0	1：経過・通過
				0		0	2：極度
				0		2	3：ただの〜である
				0		0	4：分を超える
				0		0	一語化
				0		0	?
				1		2	合計
	×	肯定	○	5	○	45	1：経過・通過
				1		2	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				0		0	4：分を超える
				0		3	一語化
				0		0	?
				6		50	合計
	×	否定	−	0	−	0	1：経過・通過
				0		0	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				0		0	4：分を超える
				0		0	一語化
				0		0	?
				0		0	合計
合計				94		215	

3い形	に	肯定	−	0	○	0	1：経過・通過
				0		7	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				0		1	?
				0		8	合計
	に	否定	−	0	○	0	1：経過・通過
				0		0	2：極度
				0		1	3：ただの〜である
				0		0	?
				0		1	合計
	×	肯定	○	0	○	0	1：経過・通過
				62		21	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				0		0	?
				62		21	合計
	×	肯定	○	0	○	0	1：経過・通過
				3		1	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				0		0	?
				3		1	合計
合計				65		31	
4な形	に	肯定	−	0	○	4	1：経過・通過
				0		7	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				0		11	合計
	に	否定	−	0	○	0	1：経過・通過
				0		0	2：極度
				0		2	3：ただの〜である
				0		2	合計
	×	肯定	○	0	○	0	1：経過・通過
				19		17	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				19		17	合計
	×	否定	−	0	−	0	1：経過・通過
				0		0	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				0		0	合計
合計				19		30	
5副詞	に	肯定	−	0	○	0	1：経過・通過
				0		1	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				0		1	合計
	に	否定	−	0	○	1	1：経過・通過
				0		0	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				0		1	合計
	×	肯定	−	0	−	0	1：経過・通過
				0		0	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				0		0	合計
	×	否定	−	0	−	0	1：経過・通過
				0		0	2：極度
				0		0	3：ただの〜である
				0		0	合計
合計				0		2	
総計				259		381	

が、明治期の1894年には使用が見られた。

今後の課題としては、本稿で扱わなかった明治期から現代にかけての橋渡し部分について調査することである。また、「行き過ぎた行動」のように「た形」であると「極度」の意味になる（「＊行き過ぎる行動」）ため、「た形」も構文化する一つの要素と考えられるかもしれない。これについても、今後の課題としたい。

【謝辞】

本稿は「青葉ことばの会」(2015年７月）の口頭発表に加筆修正したものである。発表時にコメントをくださったみなさまにこの場を借りてお礼申し上げます。

【辞典類】

『日本語国語大辞典　第２版』小学館

大槻文彦『言海』筑摩学芸文庫

【参考文献】

秋元美晴（2002)『よくわかる語彙』アルク

秋元美晴（2015)「「～ない程度に」と「～ない範囲で」に関わる構文研究」『日英語の文法化と構文化』ひつじ書房

井本亮（2002)「複合動詞「V－すぎる」の意味解釈について」『言語科学研究』第８号　神田外語大学大学院

志賀里美（2015)「複合動詞における文法化の一考察―「～切る」「～過ぎる」「～出す」を例に―」秋元実治・前田満・青木博史編『日英の文法化と構文化』ひつじ書房

中村嗣郎（2005)「「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析」『コミュニケーション科学』NO.22　東京経済大学コミュニケーション学会

前田満（2015)「構文化としての脱従属化　If only祈願文の事例を通して」『日英語の文法化と構文化』ひつじ書房

茂木俊伸（2001)「「にしか過ぎない」考」『筑波応用言語学研究』第８号　筑波大学

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店

山川太（2000)「複合動詞「～すぎる」について」『日本語・日本文化』26　大阪大学

由本陽子(2012)「動詞＋過ぎる」と述語名詞としての「動詞＋すぎ」『語彙と品詞　日中理論言語学の新展望３』くろしお出版

［注］

1　本発表では、「動詞の連用形＋動詞」以外の「名詞＋動詞」「形容詞＋動詞」「副詞＋動詞」も「複合動詞」としている。

2　「ひまわり」で抽出の際には、前後の文字数はそれぞれ25字でとったため、文単位で抽出できなかったものもある。その際は分節で区切った。

3　コーパスからの例文抽出のため、一文ではなく、途中で終わってしまっている場合がある。その場合は、文末には句点を打っていない。

4　時（さだ）過：盛りの年齢を過ぎる